

## 新潟県内市町村における子宮頸がんり患の地域集積性に関する記述疫学的研究-2007年~2011年のがん登録の結果から-

石上和男<sup>1)</sup>、遠山朗<sup>2)</sup>、佐藤佳那<sup>2)</sup>、稲垣優歩<sup>2)</sup>、  
内田絢子<sup>2)</sup>、落田知佳<sup>2)</sup>、平詩保里<sup>2)</sup>、西山奈々<sup>2)</sup>、  
内藤利洋<sup>2)</sup>

- 1) 新潟医療福祉大学 医療情報管理学科
- 2) 医療情報管理学科平成 27 年度卒業生

【背景・目的】人口動態統計から得た子宮がん死亡は、原因が異なる頸がんと体がんの区別がなく、かつり患状況も得られない。そこでり患状況を把握できる「新潟県がん登録」を用いて県内市町村における子宮頸がんり患の地域集積性を見ることにした。

子宮頸がんのり患は増加し、発症のピークが以前は 40 歳代前半であったが近年は 30 歳代となり、併せて若年層のり患数が増加していると言われている。子宮頸がんの原因はヒトパピローマウィルス(HPV)であることがほぼ確定しており、性交渉の経験がある女性であれば HPV に感染する可能性が高くなり、初交の低年齢化や性的活動期である年代の子宮頸がんり患が増加する要因と考えられている。また、HPV 感染予防として有用な子宮頸がん予防ワクチンが定期接種として予防接種法に定められているが、近年その副作用について注目され、事実上休止されている現状にある。り患の現状を把握するとともに地域集積性を明らかにすることは、健診受診率の向上や、保健教育の充実に役立つと考え、本研究を行うことにした。

### 【方法】(1)標準化り患比(SIR)の算出

新潟県がん登録から得た 2007 年から 2011 年までの 5 年間の上皮内がんを含む子宮頸がんり患数を市町村別、5 歳年齢階級別に把握した。がんのり患率や死亡率は年齢構成の異なる集団間を比較する際には、年齢構成をそろえる必要があり、標準化り患比(Standardized Incidence Ratio :SIR)を求め期待り患数を算出した。期待り患数算定のための基準人口は 2010 年の国勢調査結果を 5 倍し、市町村の 5 歳階級別人口は 5 年間分の合計を用いた。

### (2)95%信頼区間(95%CI)の算出

SIR の 95%信頼区間は、観察り患数がポアソン分布に近似するとして計算し、地図の色分けを 95%CI 値で区分し、SIR 値が有意に高い地域、有意差がない地域、有意に低い地域の 3 区分とした。

### 【結果】(1)年別子宮頸がんり患数の推移

新潟県の年別、年齢群別、人口 10 万対子宮頸がんり患数を図 1 に示した。20~40 歳代のり患数は年々増加し、特に 30 歳代のり患数は 5 年間で約 2 倍となっていた。

### (2)市町村別子宮頸がん SIR

り患が 5 年間なかった粟島浦村を除く 29 市町村別の SIR 値を「有意に高い」「有意差がない」「有意に低い」の

3 区分にしたものを図 2 に示した。出雲崎町 290.2(95%CI 150.0-506.9)、五泉市 128.8(100.0-163.3)、長岡市 116.5(104.3-129.7)、新潟市 111.8(104.9-119.0)が有意に高く、逆に糸魚川市 50.8(31.9-77.0)、胎内市 63.7(38.3-99.4)、阿賀野市 65.4(48.3-86.4)、魚沼市、佐渡市、新発田市、村上市、三条市では有意に低かった。市町村別 SIR を見ると出雲崎町と長岡市、新潟市と五泉市が有意に高く、有意ではないがそれに連なる加茂市 124.5(87.2-172.4)、田上町 119.6(67.0-197.3)が高く地域集積性が見られた。

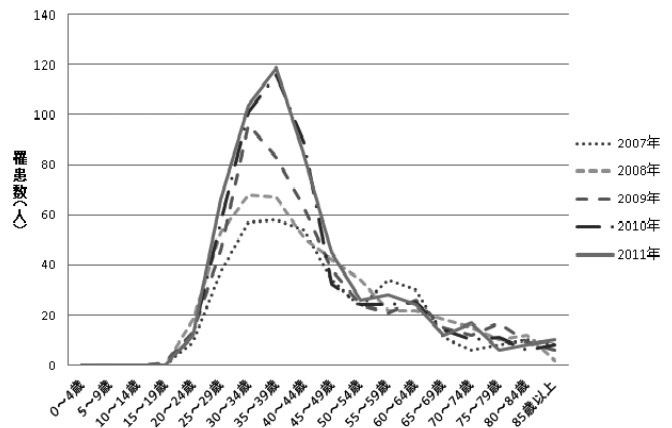


図 1.新潟県の年別、年齢群別子宮頸がんり患数

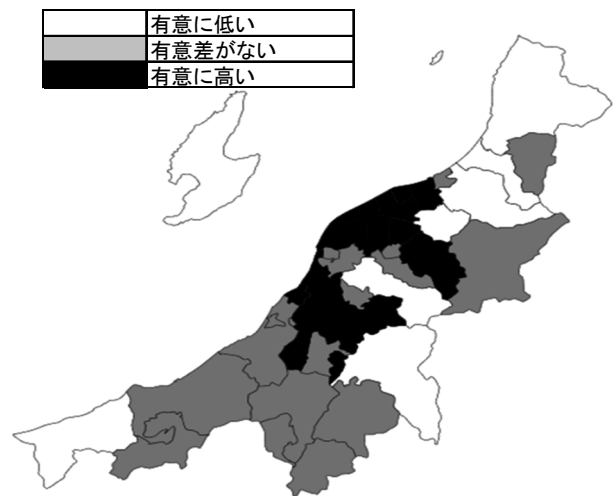


図 2 子宮頸がんの市町村別 SIR(2007 年~2011 年)

### 【考察】

長岡市及び新潟市とその周辺市町で SIR が高いことが分かったが、その理由として性的活動期である若い世代が多いことが推測される。逆に糸魚川市のように有意に低い原因を知るまでには至らなかった。

【結論】新潟市や長岡市などの都市部を中心に子宮頸がんり患が高い地域があり、これらの要因について解析する必要があると考えた。

(倫理的配慮) 本研究は新潟医療福祉大学倫理委員会の承認を得て進めた。(承認番号 17637-160106)